

コンデクターの0・1秒

盛岡第二高校3年 佐々木椿

空に向かつて手をかざす

薄くなつた酸素濃度に  
口角がそつと弧を描く  
溢れ出そうな優越感を押しつぶし  
時間を大きく吸い込んだ

紙につづつた  
昨日までの努力の跡は  
浮かされた熱に  
消えていき  
誰にも気づかれることはないけれど  
そんなことを  
惜しんではいられない

失敗を恐れた  
昨日までの苦しみは  
震えた肩を抱いて  
記憶に居残り  
歪な顔で睨みつけてくるけれど  
そんなことを  
気にしてはいられない

涙と汗を吐き出した  
役者の澄んだ魂を  
わたしが一番知っているから

零れ落ちそうな  
不穏な言葉の正体は  
ゴミ箱の中に眠らせてきた

音色の乱れた深呼吸も  
旋律には運ばれない  
舞台で踊る心拍数も  
楽譜には描かれてない  
不規則に揺れる  
古びた脳波も  
すべて交換されたのだ

ここに残されたのは  
わたしと役者の自信だけ

目立つことを嫌う  
ピアノニッシモも  
顔なじみの  
メゾフォルテも  
どこか変わり者の  
ナチュラルも  
観客気取りの  
他のみんなも  
今日できっと仲良くなる

だから、手をつないで待っていて

胸にしまった  
クレッシェンドはそのままに

歯に伝わる振動を  
知らない顔して噛み砕き  
切迫した期待が  
滑り落ちていかないよう  
手を強く握りなおす

目の前に広がる音符を  
瞳の奥にしまい込み  
そつと息を吐き出して

さあ、演奏をはじめよう

瞬きを一回

今、タクトを振った